



Field Note

ICOM2004年 ソウル世界博物館大会の参加報告



金 貞我 (COE共同研究員 / 延世大学博物館・客員研究員)

2004年10月2日から8日までユネスコ傘下のICOM (International Council of Museums) 2004年世界博物館大会が韓国のソウルで開かれた。ICOM総会は1948年に第1回大会がパリで、第2回が1950年にロンドンで開催されて以来、3年ごとに開かれることになっているが、今回のソウル大会はアジアで開催された初めての総会で、世界の博物館関係者2000名余りが参加する盛況を見せた。

神奈川大学21世紀COEプログラムからは佐野賢治、中村ひろ子、青木俊也、金貞我の4人が参加し、主にCECA (教育と文化活動国際委員会)、ICOFOM (博物館学国際委員会)、ICME (民族学の博物館・コレクション国際委員会)、ICTOP (専門人力研修国際委員会)などの各国際委員会による分科会に出席して、無形文化財保存と博物館の機能に関わる情報を収集し、各国の参加者と意見を交換する機会をもった。今回のソウル大会のテーマは「博物館と無形文化遺産」であり、神奈川大学COEプログラムと関連のある多くの情報を得ることができた。

ユネスコと無形文化遺産の保存

ユネスコが世界の遺物や遺跡など有形文化財を人類文化の遺産として指定し、保護に乗り出したのは1970年代からのことであるが、無形文化遺産に対する保存を本格化させたのは1990年代に入ってからである。すなわち、1997年、ユネスコの第29回の総会で「人類の口承及び無形遺産の傑作の宣言」が採択され、1998年にはユネスコの執行委員会で同制度の実施に関連する規約が制定されるなど、無形文化遺産の保護とその保存の重要性が国際社会で認識されはじめた。無形文化遺産とは、人類が文化共同体のなかで作り出す社会的習慣や儀礼、美的伝統、知識の形式及びそれを行うための道具や事物、あるいは自然の空間をも含むものを指すが、このような無形文化遺産の保存の課題は従来の博物館のあり方(収集、保存、展示)に対する根本的な見直しを迫るものであった。そして、2002年10月には、ICOM傘下の地域組織であるICOM-ASPAC (Asia-Pacific Regional Organization) が中

国の上海で開かれ、無形文化財に対する博物館のガイドラインとして上海憲章 (Shanghai Charter) が採択された。上海憲章は「民族や地域共同体における創造や融合、そして特殊性を認識し、その共同体の価値、伝統、言語、口伝の歴史、生活などの保存が博物館の活動のなかで理解され、また推進されていくことを支持する」という理念のもとで、有形と無形の自然遺産および文化遺産を統合する学際的な方法論と地域を横断する新たな取り組み方の確立を宣言するものであった。そして、今回のICOMソウル大会は、いままでの博物館の機能を反省し、無形文化遺産の保存の重要性を再確認すると共に、世界各国の博物館と美術館関係者に無形文化遺産の保存に関する新たな取り組みを訴えるものであった。

アジア初のICOMソウル大会開催の意義

このたびのICOM世界博物館大会がソウルで開催されたのは、韓国の「人間文化財保護制度」が無形文化財保護・保存の側面から大きな成果をあげたと評価されたことによる。

1962年から実施された韓国の無形文化財保護制度は、有形文化財が長い植民地統治や戦争などから略奪、破壊、または紛失され、文化財というべき「モノ」があまり残されていないという憂慮から制定されたといわれている。その無形文化財保護策の一つである人間文化財制度は、保存の価値のある伝統芸術・儀礼・工芸技術の分野からもっとも優れた伝承者を指定し、後継者の養成を通して無形文化遺産を断絶させず次の世代に伝承していくことを目的とする。現在、重要無形文化財として109種目が指定されており、人間文化財は213人が認定され、伝承・保護されている。この人間文化財制度は、1993年にユネスコ執行委員会の決定により無形文化財の保存に効果的な制度として採択された。以上のように韓国の無形文化遺産の保存制度とその政策が高く評価されたことから、2004年のICOM世界博物館大会がICOMの歴史上、初めてアジアで開かれることになったのである。

記憶共同体としての無形文化遺産 分科会での報告例

ソウル大会では無形文化遺産の復元と保存政策について、a) ニュージーランドの Te Papa Tongarewa 博物館の例 太平洋文化における無形文化をオーディオとビデオによってデータを記録し、保存のためにネットワークを作ろうとする試み、b) 南アフリカの Iziko 博物館の事例 地域自治に基盤をおいた国立博物館と地域社会博物館の無形文化遺産の保護活動、c) 記憶共同体と無形文化財 人の記憶を呼び起こす力（韓国の全羅南道のハウイ村に、長年失われていた村の祭りが復活することによって、村民の共同体としての記憶が取り戻された事例）d) アフリカからの学芸員の発言として、侵略・内戦による村の破壊と住民の強制移住の状況、などが報告された。

中でも、もっとも強烈な印象を残したのは、外国からの侵略、または内戦などにより村が破壊され、住民が移住を余儀なくされたアフリカの事例をめぐる熱い討論であった。その内容は、内戦で破壊された地域に博物館を建設し、伝統的な住宅と生活道具などを収集・展示したが、それだけでは固有の文化が復元したとは言えず、その地域に村民を呼び戻し、かれらの共同体の生活が自然環境のなかに復活して初めて文化の復元が可能となるのではないか、という無形文化遺産の保存活動が直面する共通の難題を指摘するものであった。

実際、従来の博物館は有形文化財を取り扱うことには多くの経験と蓄積を持っている。しかし、無形文化遺産の場合、多くの文化財は博物館の外側に存在するため、無形文化遺産の保存は生きている人間と共に行う作業になり、また、実際の行為文化を考慮した空間づくりが要求される。人間の行為を保存するためのデータの記録などにも今までとはまったく異なる方法や工夫が必要である。その任務は、従来の有形文化財を取り扱ってきたように、将来的には既存の博物館が担っていかなければならない。博物館に新たな方法論の模索と挑戦が求められる所以である。

新たな博物館の機能への模索

無形文化遺産の保存と博物館の役割に対する高い関心に関連して注目されたのが、ICTOP（専門人力研修国際委員会）の「専門的な博物館発展のためのICOM教育過程ガイドライン」であった。

ICTOPは1971年、博物館における専門的訓練と研究に関する初の教育過程ガイドライン（Basic Syllabus）を制定したが、さらに2000年には無形文化遺産に対する博物館の役割の重要性を鑑み、地域社会と密着した展示の

提供と地域住民の人的資源を活用した展示方法の開発などを重視する「地域共同体の博物館」の概念を加えた、新しい改訂版を作成した。

このように従来の博物館のあり方に対する反省と無形文化遺産に対する世界の関心が急速に拡大する中、無形文化遺産の保護と保存には多くの問題点が存在していることも議論された。たとえば、本来であれば共同体の歴史や社会の発展と共に変貌していくはずの無形文化遺産が、保護と保存という名のもとで真空パックに閉じ込められるようになるのではないか、という文化財の剥製化の懸念があげられた。さらに、人間文化財制度と関連して、文化財の序列化が文化の優劣を生み、利権とつながる恐れがあることも指摘された。また、無形文化遺産の保存策がもっとも陥りやすい問題として商業主義と観光資源化があげられた。無形文化遺産の誤った観光資源化で、人類の文化遺産が単なる曲芸や見せ物化につながる恐れがあるとの声もあった。

以上、ICOM2004年ソウル世界博物館大会で得た情報の中で、特に印象に残った事項を中心に報告をまとめた。ICOMは博物館関係者の国際的な集まりであり、博物館に関する膨大な情報が流れる情報交換の場でもある。その意味でもICOMの活動には今後も注目してゆく必要がある。次回の2007年ICOM世界博物館大会は「博物館相互理解の原風景」というテーマで、オーストリアのウィーンで開催される。



ICOM2004年ソウル世界博物館大会のエンブレムになった“ソッデ”（村の守護標、韓国）